

Title	<大會抄録>中國國民黨左派研究の意義
Author(s)	山田, 辰雄
Citation	東洋史研究 (1984), 43(3): 572-572
Issue Date	1984-12-31
URL	http://dx.doi.org/10.14989/153951
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

タ農民の反佛闘争における表現形態を考えようとするものである。

中國國民黨左派研究の意義

山 田 辰 雄

中國現代史は、結果から見れば、國共兩黨の對立に分極化し、共產黨の勝利に歸結した。このような背景のなかで、從來の中國現代史の研究は共產黨の勝利を跡づけることに焦點をあててきた。國共兩黨、とくに共產黨の果たした役割の重要性を考慮すれば、このような關心のあり方は理解できないことではない。

しかし、黨派性をもたない大部分の中國人民に提示された政治的選択は、國共兩黨の間に横たわる多様な政治勢力のなかにあった。彼らの選擇がなぜ國共兩黨に收斂していったのかが問われなければならぬであろう。そのためには、共產黨の分析だけでは不十分である。私の問題意識は、中國現代史に登場する多様な政治勢力の相互關係を分析することによって、中共中心の現代史を再構築することである。そうすることによって初めて共產黨の果たした役割が正しく評價される。したがって、そのような中國現代史は、共產黨史研究を排除するものではなく、共產黨史研究の一定の成果を前提とするものである。

私の國民黨左派研究は、以上に述べた中國現代史再構築の試みの一部分をなす。今回は、左派のもっている諸問題を、(一)黨内におけ

る組織上の地位、(二)孫文思想との關連、(三)中間勢力としての左派の立場、(四)左派の現代的意義の四點から論じてみたいと思う。

『與猶堂全書』に見える李朝後期の計量單位

——李朝の課稅單位「結」負々制についての

丁若鏞（一七六二—一八三六）の理解——

山 内 正 博

題記の全書には隨處に矛盾にみちた當時の計量單位の實態が指摘され、十進法によるそれらの統一的體系への改革が主張されるが、なかでも特に注目されるのは、田土の廣狹と生産性の高低を組みあわせて一定の課稅單位とした獨自の結—負制に對するそれである。長さ（度）、かさ（量）、重さ（衡）に較べて實態として掴み難い廣さ（畝）について、李朝では布種量（斗）、耕作量（日）と共に本來的には收穫量である結—負—束—把が量の概略を示す單位として一般に使用された。

土地の生産性にかかわりなく結あたり一定額の穀物を徵收できるこの結—負制は課稅單位としては確かに便利であったが、他方それぞれの境界の畫定や生産性の認知に問題があり、また二十年に一度の量田も久しく行われなかったことから現實には矛盾が山積した。

これらの矛盾を解決する方策としてまず頃—畝制によって田土の境界を畫定せよとする與猶堂の主張にはそれなりの根拠があったが、それは元老宿徳によって拒否された。祖法を輕々に變更できな